

下	
<p>〔夏〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ○二月も過ぎぬ云々、紫上を二條院に移し奉る ○柏木右衛門督中納言になり落葉宮を得奉る ○四月十餘日柏木忍びて女三宮に逢ひ奉る ○紫上俄に絶え入り物怪現る、受戒の事あり ○六月になりて紫上少し御ぐしもたぐ ○女三宮「五月より御懐妊云々」 ○源氏君三宮と柏木との密事を知り給ふ ○臘月夜尙侍御ぐしおろす <p>〔秋〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ○八月「九月云々」 ○十月落葉宮の朱雀院五十御賀 ○十二月十餘日朱雀院五十御賀の試樂あり ○明石女御匂宮を産み給ふ ○十二月廿五日源氏君の朱雀院の御賀 <p>〔冬〕</p>	<p>〔春〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「年かへりぬ云々」 ○女三宮薫君を産み給ふ ○女三宮御惱によりて御ぐしおろし給ふ ○柏木權大納言になる ○柏木逝く ○「彌生になれば云々」、薫五十日祝 ○源氏君「五十八を十取捨てたる御よはひ云々」 ○「卯月ばかり云々」、夕霧落葉宮を訪ふ ○「秋」方になれば云々
紫上卅七 (今按ず るに三 十九)	匂宮誕生
十 七 歳	十 四 八 歳

柏木

四十八の正月より

〔春〕 ○「年かへりぬ云々」
○女三宮薫君を産み給ふ
○女三宮御惱によりて御ぐしおろし給ふ
○柏木權大納言になる
○柏木逝く
○「彌生になれば云々」、薫五十日祝
○源氏君「五十八を十取捨てたる御よはひ云々」
○「卯月ばかり云々」、夕霧落葉宮を訪ふ
○「秋」方になれば云々

薫君誕生
匂宮誕生

十 四 八 歳

横 笛	
四十九の春より	
<p>〔春〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ○柏木の一周忌に源氏君誦經せさせ給ふ ○朱雀院尼宮に土産を贈り給ふ <p>〔秋〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ○「秋の夕の物哀なるに云々」、夕霧落葉宮を訪ふ、御贈物に柏木の遺愛の笛を得 ○夕霧笛を携へ六條院を訪ふ、薫君に對する夕霧の疑ひ 	<p>〔夏〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ○夏頃蓮の花の盛に、匂宮念誦堂の開眼供養し給ふ ○「秋ごろ云々」 ○十五夜源氏君尼宮方にて鈴蟲の宴し給ふ ○源氏君俄に冷泉院に伺候徹宵吹奏作文し給ふ <p>〔冬〕</p>
匂宮 三つばか	三つばか
十 五 歳	十 四 九 歳

横 笛

四十九の春より

〔春〕 ○柏木の一周忌に源氏君誦經せさせ給ふ
○朱雀院尼宮に土産を贈り給ふ
〔秋〕 ○「秋の夕の物哀なるに云々」、夕霧落葉宮を訪ふ、御贈物に柏木の遺愛の笛を得
○夕霧笛を携へ六條院を訪ふ、薫君に對する夕霧の疑ひ

匂宮
三つばか

十 四 九 歳

鈴 蟲

五十の夏より

〔夏〕 ○夏頃蓮の花の盛に、匂宮念誦堂の開眼供養し給ふ
○「秋ごろ云々」
○十五夜源氏君尼宮方にて鈴蟲の宴し給ふ
○源氏君俄に冷泉院に伺候徹宵吹奏作文し給ふ
〔冬〕

三つばか

十 五 歳

夕 霧

同じ年の八月より

〔冬〕

- 一條の御息所物のけに煩ひて小野に移り給ふ
- 八月中の十日ばかり夕霧小野に至り、御息所の病を訪ひ落葉宮に對面
- 一條の御息所うせ給ふ
- 「九月に成りぬ云々」
- 同月十三日夕霧小野にいたる
- 夕霧夫婦の疎隔
- 落葉宮一條の宮に歸り住み給ふ、夕霧宮の東の對の南面を我が御方に假にしつらひて居る
- 「冬の夜云々」、落葉宮塗籠にこもりて夕霧を避け給ふ
- 雲居雁方邊に托し里方に歸る

三つばか

十 五 歳

御法

五十一の春より秋まで

御法

- 〔春〕 ○紫上いたく憫む
- 三月十日紫上二條院にて法華經千部供養、女方集りて徹夜遊ぶ
- 桐壺女御はじめて后の宮と見ゆ明石中宮と申す
- 〔夏〕 ○夏に成りて云々、中宮紫上を見舞ふ
- 〔秋〕 ○秋待ちつけて云々、紫上の病床に中宮及源氏君つどひ給ふ
- 八月十四日紫上逝く
- 源氏君念佛三昧に日を送り給ふ

五十一歳

まほろし

五十二の春より年の暮まで

幻

- 〔春〕 ○春の光を見給ふにつけても云々、源氏君籠り居給ふ
- 二月になれば云々
- 春ふかく成り行くまゝに云々、源氏君匂宮を相手に日を銷し給ふ
- 〔夏〕 ○夏の御方より御衣かへの御装束奉る
- 五月雨はいと詠めくらし給ふより外の事なく云々、源氏君夕霧と紫上を偲び給ふ
- いと曇き頃云々
- 〔秋〕 ○七月七日も例にかはりたる事多く云々
- 正日紫上遺志の曼陀羅供養
- 九月九日云々
- 〔冬〕 ○神な月は大方も時雨れがちなる頃云々
- 五節などいひて云々、「今はと世をさり給ふべきほど近く覺しまうくるに

五十二歳

歳

雲隠

- △巻の名のみありて物語なし
- △幻巻より匂宮巻の間八年なり、源氏君此間にかくれ給ふ
- △夕霧の右大臣に成りしも此間なるべし

- 「年の暮れ行くも心ぼそう云々」、源氏君出家準備に文鼓を焼き給ふ
- 源氏君最後の御佛名

歳

竹河

薰君十四より
廿三の秋まで

薰君
侍従
右近中將

た

○薰君「其頃四位侍従十四五ばかり云々」

〔春〕

薰君十五六

○正月朔日ごろ夕霧玉鬘を訪ふ、
薰君おなじく訪問
○三月玉鬘の娘二人櫻を賭物にして恭うつ

〔夏〕

○「卯月に成れば云々」、九日玉鬘の姉姫冷泉院に参る姫君十八九

〔秋〕

○同じ姫君七月よりはらみ給ふ

〔春〕

薰君十六七

匂宮

十四より
廿の正月まで

に

○「ひかり隠れ給ひにし後云々」

○匂宮御元服、兵部卿宮と聞ゆ

〔春〕

○二月薰君の元服院にてせさせ給ひ、十四にて侍従になる

〔秋〕

○薰君右近中將になる

△薰君十五より十八までの事は年立定かなる物語なし

ほ

ふ

十 歳 五 十 歳 四 十

薰君
三位宰相
中將如故

け

○「年返りて云々」
○正月十四日男踏歌

〔夏〕

○四月冷泉院の女御女宮をうみ給ふ

○玉鬘は中の姫君に尙侍を譲り、
姫君やがて内に参る

△竹河卷初より九年の間の物語は年立定かならず、又詞書に

冷泉院の女御の事をいふとして「年頃ありて又男みこ生み給ひつ」といふ詞は二三年をこめていへるなるべし

○「源侍従とていと若うひはつなりと見しは宰相中將にて匂や薰やと聞にくゝめで騒がる云々」

△是は薰君の事なり、此詞十九の年のやうにも聞ゆれど、只

宰相中將にておはせし程を大方にいへるなるべし

み

○薰君三位の宰相にて猶中將を兼ね給ふ

十 歳 九 十 歳 八 十 歳 七 十 歳 六

〔はし姫〕
此あざり
冷泉院も
親しく候
ひし御経
どをしへ
ゆる人な
云々し
年この巻
立なりの

が

や

橋姫

〔春〕
○正月夕霧君賭弓の還鑿を六條院にて行ふ
廿二の冬まで

は

宇治の八宮京の邸焼けて宇治に移り給ひ又姫君たちの事など書きたるはこれより前の事なり

○宇治の阿闍梨冷泉院の御前にて宇治の八宮の有様をかたり申す
○薫君宰相中將になる
○薫君はじめて宇治の宮に参る

△廿一の年定かなる物語なし

し

○薫の宇治宮に心寄せ仕うまつり給ふ事三年ばかり云々

〔秋〕
○秋の末つ方八宮寺に籠りて御念佛行ひ給ふ、この時薫君宇治に詣で大君をかい間見し給ふ、此ついで

〔はし姫〕
辨のおも
と少し足

十 二 歳一十二 歳 十 二

夕霧君左大臣
薫君中納言

は

〔秋〕
○夕霧君左大臣。紅梅君右大臣。薫君中納言。三位の君夕霧男宰相になる
○紅梅右大臣大櫻行ふ

姫

〔冬〕
○十月五六日のほど薫君宇治に参る
○薫君辨より柏木の遺書を受け給ふ
に辨のおもと柏木の事を語る
○薫君或夕暮匂宮に参りて宇治宮のさまを語り給ふ

らぬ程云々

二 歳

椎が本

廿三の二月より廿四の夏まで

〔春〕

○二月廿日の程匂宮初瀬に詣でての歸るさ
宇治に遣返し給ふ
○匂宮姫君に消息

椎

〔秋〕

○薫君中納言になる
○七月薫君宇治に至り姫君の御琴聞き給ふ
○秋深く成り行く云々、八宮御行の爲に寺に籠り給ふ、その結願の日より惱み給ふ
○八月廿日夜八宮失せ

〔椎が本〕
八宮の大
君は廿五
中君廿三

三 十 二 歳

〔宿木〕
廿四の夏より
廿六のまで
給ふ
袋は奉りて
給ふ
云々
は此巻の
年立なり

紅梅

宿木

紅

や

本

が

此巻始めのほど
は遙に前の事也

此巻はじめの程
は遙に前の事也

- 按察の嫡女東宮へ
参り給ふ
- 按察匂宮に紅梅を
贈る
- 按察夫妻匂宮と薫
君とを評す

- 〔夏〕
今上の藤壺の女御う
せ給ふ(女二宮の御
母)

- 〔春〕
○新年阿闍梨早蕨を姫
君に奉る
- 「年かはりぬ云々」
- 「花盛の頃云々」
- 三條の宮焼失、入道
宮六條院に移り住み
給ふ
- 〔夏〕
○その年「常よりも早
き人々わぶるに云
云」
- 薫君宇治に詣で姫君
達をかいま見給ふ

- 給ふ
- 九月にも成りぬ云
云
- 薫君宇治に参る
- 〔冬〕
○「年もくれにけり云
云」
- 薫君又宇治に参る

〔竹河〕
宰相中將
夕霧廿七
八男

〔紅梅〕
紅梅君の
嫡女十七
八(やどり
木)今上の女
四の宮十

歳

二

十

四

總角

廿四の八月より
年の暮まで

總

- 〔秋〕
○薫君宇治の八宮の一
周忌せさせ給ふ
- 薫君宇治を訪ひ大君
に意中を告げ給ふ
- 薫君又宇治にいたり
中君に近づき給ふ
- 八月廿六日薫君匂宮
を伴ひ中君に逢はせ
給ふ
- 九月十日の程匂宮薫
君宇治におはします
- 〔冬〕
○十月朔日頃匂宮紅葉
見に宇治にいたり給
ふ、此度は中君に逢
はずその後忍び歩き
をとめられ給ふ
- 薫君宇治に至り給ふ
この頃大君煩ふ
- 「十一月に成りて云
云」

梅

- 匂宮宇治の八宮の
姫君に通ひ給ふ

ど

- 〔秋〕
○今上菊盛なる頃藤
壺に渡らせ給ふ
- 帝女二宮を愛し給
ふ
- 帝薫君と團基し給
ひ女二宮を賭け給
ふ
- 夕霧六君を匂宮に
と決意

り

〔春〕

○「年かはりぬ云々」

早

蕨 廿五の春

〔春〕

○「春の光を見給ふにつけても」

○蕨君匂宮の主客字治の姫君を懐ひ給ふ

○辨のおもと尼に成る

○二月七日匂宮二條院に中君を移し給ふ

○同月廿餘日六君御裳

早

角

○蕨君大君を見舞ひ公私を搦ち介抱し給ふ

○大君逝く、蕨君御いみの程字治にこもり給ふ

○「師走の月夜云々」、匂宮大君の中陰の程字治を訪ひ給ふ

○蕨大君の追慕に耽るり給ふ

二

歳

木

〔夏〕

○「女二宮御服はてぬれば云々」、蕨君の縁談進行

〔秋〕

○「八月に成りぬれば云々」

○蕨君朝顔を折りて二條院を訪ひ給ふ

○匂宮同月十六日に夕霧君の六君におはしそむ

○浮舟の來歴を中君始めて蕨君に語る

○九月廿餘日蕨君字治にいたり、故八宮の寢殿を山寺に移して御堂造るべき事を掟て、又辨の尼に浮舟君の事を問ひ給ふ

〔冬〕

○蕨君字治の紅葉を中君に贈り給ふ

〔春〕

○「はかなくて年も暮れぬ云々」

蕨

着

○蕨君この月廿餘日のほどに三條の宮に移り給ふ豫定

○「花のほど云々」、蕨君二條院に中君を訪ひ給ふ

(宿木)

廿六の君

(同)

浮舟君

廿ばかり

歳

五

十

薰君
權大納言
右大將

東屋
宿木と同
じ年の秋

屋東

- 〔秋〕 ○八月浮舟を左近少將に嫁せんとするに、常陸守の繼子と聞きて少將は引ききたがへて守の末の娘に通ひそむ
- 北方憤り浮舟を伴うて中君を訪ふ
- 匂宮おして浮舟に對面し給ふ
- 北方周章して浮舟を三條の家に移す
- 秋深く成り行く頃宇治の御堂造りはてぬ云々、薰君宇治に行き給ふ
- 九月十三日薰君辨を介して浮舟に逢ひ、又の日ともなひて宇治の宮に移しおき給ふ

- 〔夏〕 ○正月晦日がたより中君例ならぬ様に惱み給ふ
- 二月朔日ごろ薰君權大納言の右大將になる
- 同じ日の曉に中君男宮生み給ふ
- 同月廿餘日今上の女二宮御裳着、又の日薰君女二宮の御方に参りはじむ
- 三月晦日今上藤壺にて女二宮御名残の藤花宴を催し給ふ
- 〔夏〕 ○四月女二宮薰君の三條宮に移り給ふ
- 同月廿餘日薰君宇治にいたり新造の御堂を見給ふ、この日浮舟初瀬詣のかへるさ宇治宮に来るを薰君かいまみ給ふ

匂宮の若
宮誕生

〔東屋〕
左近少將
廿二三

〔同〕
常陸守の
末女十五

二 十 六 歳

浮舟
廿七の正月より三月の末浮舟の身
投げんとせし所まで

舟浮

- 〔春〕 ○正月朔日過ぎたる頃云々
- のり弓内宴など過して云々、匂宮宇治におはして浮舟に逢ひ給ふ
- 二月朔日ごろ薰君宇治に詣で給ふ
- 同月十日ばかり内の御作文あり、其夜匂宮宇治におはして、浮舟を伴ひ時方がをち因幡守が家にやどりて逢ひ給ふ
- 匂宮は三月の晦日に薰君は卯月の十日ばかりに、浮舟を京に移し給ふべしとの御心まうけ聞ゆ
- 廿日あまりにも成りぬ云々
- 匂宮宇治におはします、守りの固ければ浮舟に逢はずして歸り給ふ
- 浮舟身を投げんと思ふ

蜻蛉
浮舟の身投げんとせし
翌朝より廿七の秋まで

蜻

- 〔夏〕 ○式部卿宮うせ給ふ
- 浮舟君の行方不明
- 「月たちてけふぞ渡らましと思し出で給ふ夕霧云々」
- 今上の二宮式部卿になり給ふ
- 「はちすの花盛に云々」、明石中宮六條院にて八講行ひ給ふ

手習
蜻蛉巻の始と同じ頃より
廿八の夏まで

手

- 〔夏〕 ○小野の尼君初瀬詣のかへるさ宇治院に宿り、浮舟の物にとられてあるを見つて伴ひて小野に歸る
- 「四五月も過ぎぬ云々」
- 「秋に成りゆけば云々」、中將小野に来て浮舟をかいま見る
- 八月十餘日中將又小野に来る
- 九月尼君初瀬にまうづ、留守の程

〔手習〕
横川僧都
の母八十
餘妹の尼
五十ばか
り

二 十 七 歳

鈴

〔秋〕
○「涼く成りぬとて云々」

習

に浮舟尼に成る
○横川僧都一品宮の御加持に参り浮舟の事を中宮にかたり申す
○中將いよ／＼浮舟に執心

〔春〕
○「年もかへりぬ云々」
○薫君浮舟のはての業行ひ給ふ
○その頃小宰相、浮舟生存せる由の横川僧都の物語を薫に申す

夢浮橋

手習巻と同じ
四月より

橋浮夢

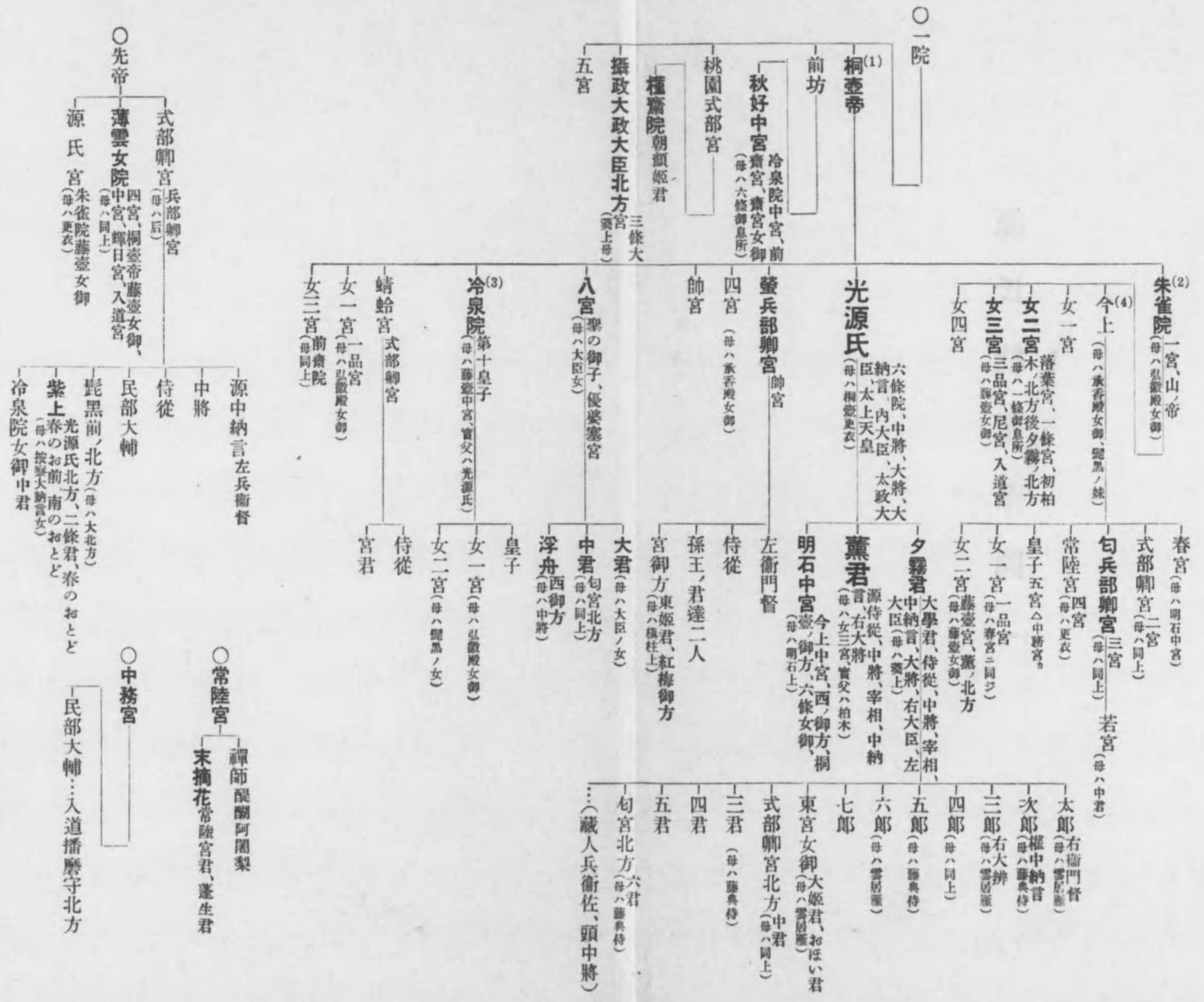
○「山におはしまして例せさせ給ふやうに經佛など供養せさせ給ふ云々」、又の日薫横川僧都の坊を訪ひ物語し給ふ
○薫君殿に歸りて又の日小君を小野に遣り浮舟を訪ひ給ふ
○小君薫君の消息を浮舟尼に傳ふ

〔手習〕
小野大尼
君の孫
伊守三紀
ばかり

二 十 八 歳

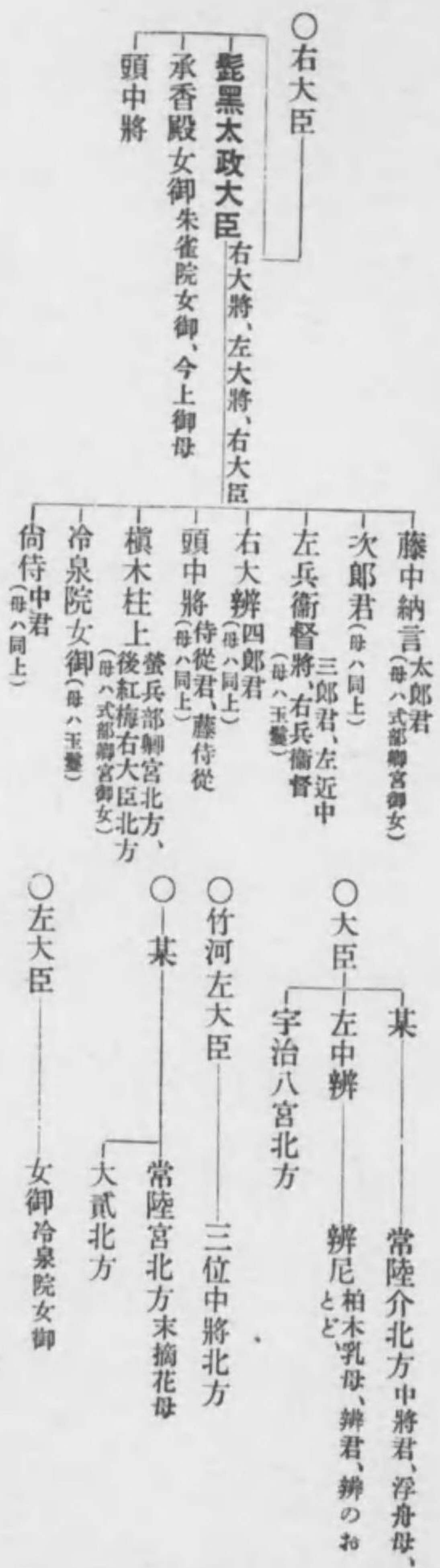
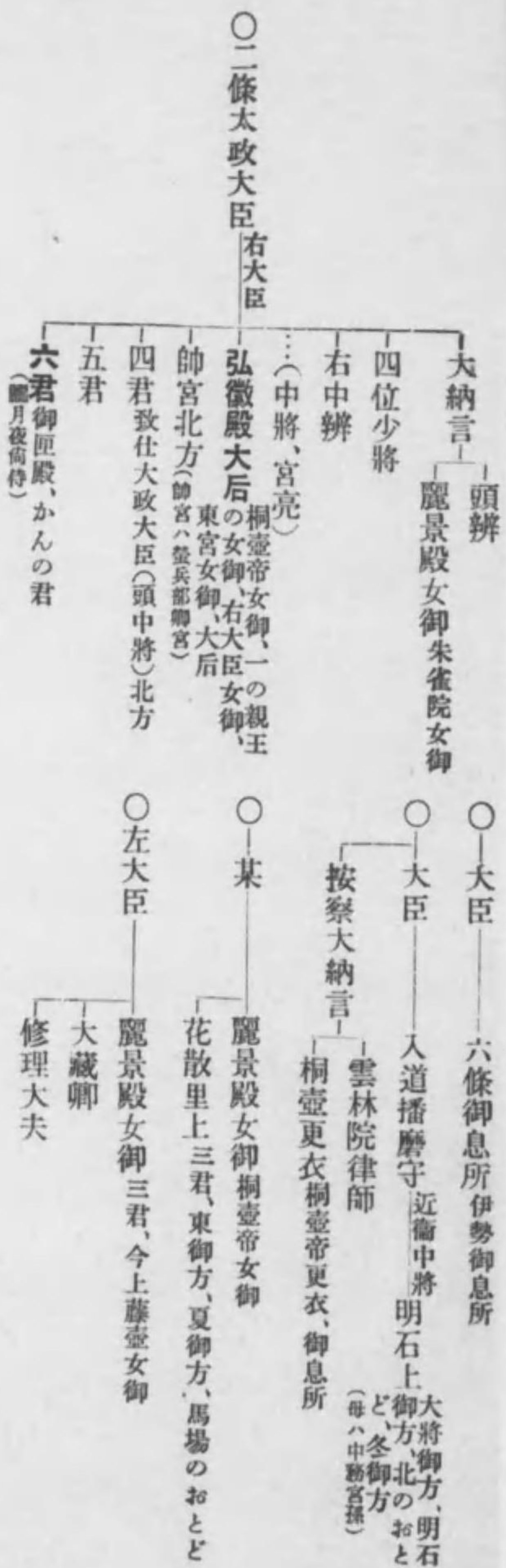
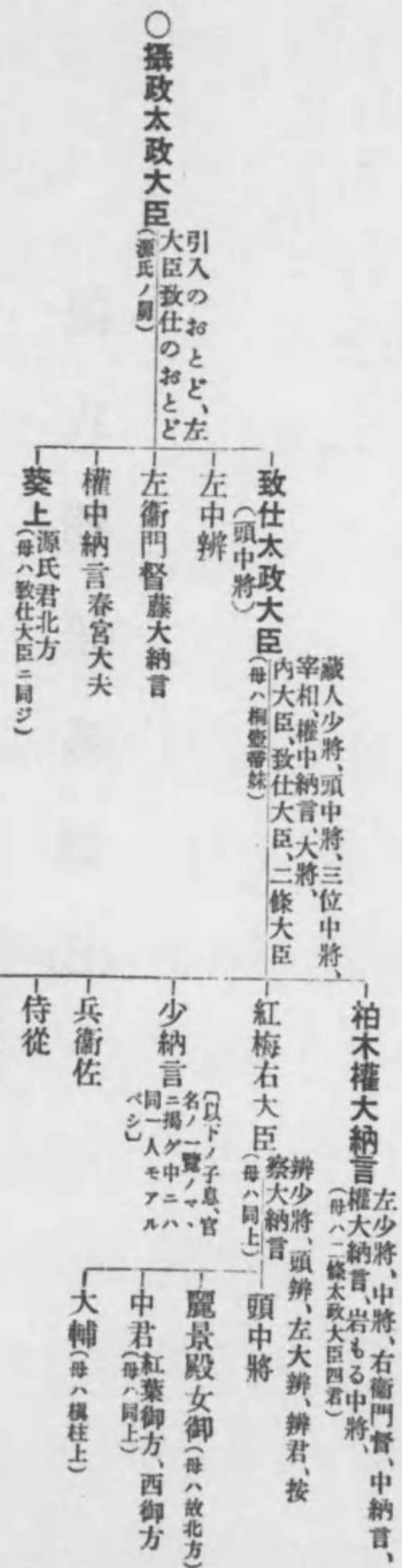
源氏物語系圖 (一)

(一) 皇胤



源氏物語系圖 (二)

(二) 大臣族



源氏物語系圖 (三)

(三) 卿相族

○右衛門督 中納言 空輝伊豫介妻、空輝尼君

右衛門佐小君

○太宰少貳 夕顔乳母、夫

豐後介兵藤太

次郎

三郎

揚名介妻(母ハ夕顔乳母)

姉おもと

兵部君あてき

○伊豫介 常陸介、空輝、夫

河内守紀伊守

藏人靱負佐右近將監

軒端荻(空輝繼子) 藏人少將妻、西御方、西君

○三位中將 夕顔上頭中將妻、のち源氏妾

宰相 宰相君源氏家女房

○播磨守 源良清 源少納言、靱負佐、五節君

○按察大納言 女(母ハ北山僧都妹)

○北山僧都 尼君按察大納言北方、母、紫上祖母

○兵部大輔 大輔命婦(源氏乳母)

○太宰大貳 筑前守

○尼君 惟光父ノ乳母 僧

和泉前司

中納言君臘月夜女房

辨紫上女房

大輔命婦(母ハ左衛門乳母、筑前守妻)

五節君

○常陸介 浮舟繼父、陸奥守 常陸前司

藏人式部丞(母ハ先北方)

源少納言妻(母同上)

讀岐守妻(母同上)

藏人右近將監(母後北方、浮舟ト同腹)

小君(母ハ同上)

左近少將北方(母ハ同上)

大輔君 宇治中君女房 右近同上

○姉 右近浮舟女房

○大藏大輔仲信 兼ノ家司 大内記道定妻

○某 因幡守 出雲權守時方左衛門大夫

○某 浮舟乳母 大德

○阿闍梨 右馬頭

○蜻蛉式部卿宮後北方宮君繼母

○横川僧都(何某僧都)

○妹尼君 常陸介北方

○某 紀守

○宮内卿宰相 明石中宮乳母(母ハ故院宣旨)

○按察大納言 五節君少女卷ノ五節

○大將 左近少將常陸介塔

○左中辨

○柏木乳母 宇治辨尼母

○朱雀院女三宮乳母 中納言乳母 小侍從

○一條御息所朱雀院更衣、落葉宮母

○某 大和守 少將君落葉宮女房、小少將君

○中將小野尼の塔 阿闍梨小野僧都弟子

○禪師君 少將尼小野尼弟子

○衛門督 中將北方(母ハ小野僧都妹)

跋

窓前の寒櫻はふさ／＼と垂れて紅に匂ひ、亭後の夏蜜柑は日影おほく黄に光つてゐる。近く松籟と波の音との交響樂を聴き、遠く一碧の空と水とを見渡して思索に耽つてゐる。これは知人の別荘における私の熱海の一日である。

私は書齋から學校へといふ生活で、世間へは殆ど出ません。朝は早く夜は遅く、今年も元日から筆を執つてゐる。文字通り寸暇なしで、お負けに今年の正月は家政管理者がこの二十日餘も留守なので、内外公私一人で切廻してゐるので、しまひには頭は惱亂、體は困憊の極に達し、物を考へるとすぐ睡り込んでしまふ。處へ新年宮中御歌會に召歌のお達しが來た。進退谷つて氣を換へる爲、只一泊の豫定で、ここに飛んで來たのである。

御題は海邊巖、歌はいくつも詠めたが一つだつて物にならない。あぐんでしまつ

て、さて仕掛けた仕事にふと思が轉すると、さういふ定本源氏の跋がまだ書けて居なかつた。

この上巻が大正の十四年に公刊されてから、中巻は昭和三年に成り、下巻はこの五年にかゝつて漸く纏まることゝなつた。異本の校勘はその以前から遣つてゐたことだから、それは計算外として、定本を作り新解を興へる目的で起稿したのが、確か大正十年頃と記憶する。すると今日まで約十箇年の日子を費したことになる。

可なり十分な準備と長い経験とを積んでゐてさへ、かう長引いてしまつた。いかにその仕事が煩瑣で厄介な事が想像されよう。尤も五十四帖の浩瀚な内容をもつてゐるものを、眞面目に忠實にと片付けてゆくのだから、據あるまい。

校正にしてからが、總計二千二百頁といへば、随分な大部なものである。本文鼈頭を通じて頗る經濟的に字數を充實させたから、おなじ一頁でも他の四頁位にむかふ組方である。その上細字と來てゐる。随つて誤植の數も多い。のみならず困つた

事は、解釋は本文の難易に随ふものだから、その密度が平均しないので、鼈頭と本文との距離がともすれば並行を缺くのであつた。一行の空間もなしに詰めてあるのだから動きが取れない。止むを得ず初校の時は、本文は本文だけ鼈頭は鼈頭だけで、おのおの別々に組みあげ、さて兩方を引合はせて、或は本文の行數を遣り繰り、或は鼈頭を伸べ縮め、或は挿圖を取捨して、大體の見當が出合ふやうに作り上げ、再校になつて始めて、兩方を一頁に組み附けて出させる。こんな譯で大抵五校から六校に及んで漸く朱筆を擱くのであつた。全くこの校正にはまゐつた。

本書が出てから後、世間には幾多の源氏の注書が續出した。皆それ〴〵堂々たる大家先生の署名があるから、定めし結構なものであらう。私は只それ等の著が餘に無造作に速成されることに驚歎してゐる。有智無智較ぶれば三十里、私のやうな鈍な者は、まあ龜さんの家法で遣つてゆくより外仕方が無いのである。

私もお年の加減で、こんな愚痴をこぼすやうになつた。然し遣るべき事は山、寒

いとて湯などに漬つてだらけては居られない。どれ急いで書齋の人となつて、又次の仕事に取懸からう。

終に臨んで、橘宗利君が本書の完成に對して多大なる助力を與へられた事を、私はここに特筆する義務を有する。君が萬年筆一つで震災に駆け出したのも、確かこの仕事を手傳つてくれてゐた時だと記憶する。永年劬勞した本書の完成に、今頃は君も必ず一大太白を浮べて、喜んでゐられるだらうと思ふと、私も愉快である。

昭和五年一月 熱海にて

元 臣 しるす

昭和五年三月五日印刷
昭和五年三月八日發行
昭和五年五月三十日三版

定本 源氏下

定價金 參圓八拾錢

著者 金子元臣
東京市小石川區白山御殿町百十番地

發行者 三樹退三
東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者 守岡功
東京市本所區番場町四番地

印刷所 東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社本所分工場



發行所

東京市神田區錦町一丁目
振替口座東京四九九一番

株式會社 明治書院

電話 神田 (25) 二二一四
六六九一
九九六五
番番番

金子元臣先生著

古今和歌集評釋

菊判洋布裝全一冊
紙數一千百餘頁
定價金六圓八拾錢
送本料金貳拾四錢

本書は實に金子先生の古今集に關する研究の集大成である。講説はいふまでもなく釋と評との二大綱を以て組織されてゐる。釋はこれを語釋と意釋とに分ち、評はこれを批評と考異とに分けてゐるが、詞書及び歌に現れた事實、典故の説明、辭句解釋の懇切、鏡花水月の釋法に従つて、一字一語の出入をも忽にしてゐないところ、作者の環境、時代精神の認識等當時の社會風潮の上にたつた批評、前賢の説に對する是非の論究等、すべて信頼するに聊かの疑を抱く餘地がない。なほ卷頭の概説はこの集の概念と豫備知識を與へるための意圖によつて成されたものであるが、それはまた別個の研究論文として、古今集を中心としたる文學史の一部であり、書史學的論究でもある。卷末に作家列傳、語釋索引、類句索引を付した。要するに本書は我國における古今集研究書の最高位に置かるべきものであるとの定評がある。

913.36

KA534

3

終